

# 自尊感情が否定的内容の自己開示に与える影響

高橋 真悠<sup>\*1</sup>・伊藤 宗親<sup>\*2</sup>

本研究の目的は、自尊感情、自己価値の随伴性と否定的内容の自己開示の程度、動機について検討することであった。予備調査では、否定的内容の自己開示動機尺度を作成することを目的に研究を行い、「情動解放的自己開示動機」、「相談・共感追求的自己開示動機」、「親密感維持的自己開示動機」の3因子18項目を得た。本調査では、自尊感情が高い人の方が低い人よりも自己開示を行うこと、自己価値の随伴性の「関係性調和」に随伴する程度が低い人よりも中程度の人、高い人の方が「親密感維持的自己開示動機」を強く持っていることが明らかとなった。

〈キーワード〉自己価値の随伴性 否定的内容の自己開示動機

## 問題と目的

私たちは他者に自分のことについて話したり、悩みを打ち明けたりすることがある。このように自己を他者に開くことを自己開示という。榎本(1997)は、自己開示を「自分がどのような人物であるかを他者に言語的に伝える行為」と定義した。自己開示の内容について、本研究では、打ち明ける際に抵抗を感じやすい否定的内容の自己開示について研究を行った。また、自己開示の動機は4つあり、それらは「理解・共感追求的自己開示動機」、「情動解放的自己開示動機」、「親密感追求的自己開示動機」、「相談的自己開示動機」である(榎本, 1997)。しかし、他者からの反応を不安に思うために自己開示を行わなかったり(榎本, 1997)、自尊感情が低い人の方が高い人に比べて否定的内容の自己開示を行わなかったりする(亀田, 2003)。このように自己開示を行う時には少なからず抵抗感を感じている。自尊感情が低い人は、傷つくことを予想し(片山, 1996)、自尊感情が高い人よりも否定的内容の自己開示を行った後にマイナスの影響を予想するため自己開示を避ける(亀田, 2003)。それに対して、自尊感情が高い人は相手に話しても効果がないと考える傾向がある(亀田, 2003)。これらのことから、自尊感情の高さによって否定的内容の自己開示を行った後の

効果に対する予想や自己開示に抵抗を感じる要因に違いがあるため、否定的内容の自己開示をする際の動機も異なるのではないかと考えられる。

自尊感情は、従来、その高さに注目されてきたが、安定性に関する研究も行なわれている。例えば、自尊感情が不安定な人は、日々の出来事に影響を受けやすいこと(Greenier, Kernis, McNamara, Waschull, Berry, Herlocker, & Abend, 1999)や、自尊感情の低下後に他者から評価されることを防ぎ、他者からの受容を引き起こす行動をすること(市村, 2011)が示されている。また、Crocker & Wolfe (2001)は、ある領域における成功や失敗に伴って、自尊感情が変動する性質を「自己価値の随伴性」と呼んだ。内田(2008)は、自己価値の随伴性尺度の日本版を作成し、自尊感情は、「競争性」、「外見的魅力」、「関係性調和」、「他者からの評価」、「学業能力」、「倫理的であること」、「家族・友人サポート」の7つの領域に随伴すると考えた。また、仲間と良い関係を保つことを重視する「関係性調和」、他人からの評価を重視する「他者からの評価」と従来の自尊感情との間に負の相関があることを示した。これらのことから、自己価値が「他者からの評価」に随伴する程度の高い人の方が他者からの反応を不安に思い否定的な内容の自己開示を行わないのではないか、「関係性調和」に随伴する程度

\*1 岐阜大学大学院教育学研究科

\*2 岐阜大学総合情報メディアセンター

Effect of self-esteem on negative self-disclosure

が高い人の方が自己開示の時に相手との親しさを維持することを強く思うのではないかと考えられる。

また、榎本（1997）は、大学生の自己開示相手は同性の友人が中心であることや、三上・山口（2003）は、開示相手との親密度が高い方が自己開示に対する抵抗感を感じないことを示した。そのため、本研究では、否定的内容の自己開示を行う相手について、親しい同性の友人を想定することを求めた。

そこで、本研究では、自尊感情の高さと否定的内容の自己開示の程度、動機との関連について、また、自己価値の随伴性領域のうち「他者からの評価」、「関係性調和」と否定的内容の自己開示の程度、動機との関連について検討することを目的とした。

## 予備調査

### 目的

否定的内容の自己開示のみに限定した自己開示動機を測定する尺度はこれまでの研究ではなく、尺度を作成することが必要であった。そこで、予備調査では、否定的内容の自己開示動機尺度を作成することを目的に調査を行った。

### 方法

被調査者：東海地区の大学生 213 名に質問紙調査を行った。回答に不備などがあった 11 名を分析対象から除き、有効回答は 202 名（男子 85 名、女子 117 名）であった。また、平均年齢は 20.13 歳（SD=1.38）であった。

### 質問紙の構成

- 1) 基本的属性 学年、年齢、性別の記入を求めた。
- 2) 否定的内容の自己開示をする相手の想定

否定的内容の自己開示をする相手について、今までに悩みを相談したことのある親しい同性の友人 1 人を想定し、名字のアルファベット 1 文字の記入を求めた。

- 3) 否定的内容の自己開示動機を測定する尺度

榎本（1997）の自己開示動機尺度、小林・宮原（2012）の自己開示動機尺度、野口（2010）のネット自己開示動機尺度、市村（2011）の自尊感情低下後の回復行動尺度の項目を参考に、否定的内容の自己開示をする際の動機にふさわしいように項目を修正した。合計 22 項目の否定

的内容の自己開示動機尺度に用いる項目を作成した。

「落ち込んだり、自信を失ったり、悩んだりした時にその出来事やその時の思いを親しい友人に話したり、相談したりすることがあると思います。そのような時、あなたはどのようにして親しい友人に話そうと思いますか。」という教示文により被調査者に 5 件法で回答を求めた。

### 手続き

2012 年 7 月下旬から 8 月上旬に質問紙を個人的に配布し、記入を求めた。質問紙の表紙には、調査に協力したくない場合は回答しなくても良いこと、途中でやめたくなった場合は回答を中止しても構わないこと、回答について個人は特定されないことを記した。

### 結果・考察

否定的内容の自己開示動機尺度を構成する 22 項目の得点の平均値、標準偏差を求め、天井効果とフロア効果について確認した。その結果、3 項目にフロア効果が見られたが、1 項目は 1.00 に近いことから除外せず、2 項目を除外した。否定的内容の自己開示動機尺度を構成する 20 項目に対して、主因子法プロマックス回転による因子分析を行った。固有値の減衰の仕方から 3 因子であると判断した。因子負荷量が .35 未満の項目と 2 因子に高い因子負荷量を示した 2 項目を削除した。残りの 18 項目に対して、再度同様の方法で因子分析を行った。3 因子による累積寄与率は、50.66 %であった。また、各因子は以下のように解釈された（Table1）。各因子の命名については、榎本（1997）を参考に行った。

第 1 因子は、不安な気持ちや葛藤を相手に伝えることによって解消しようとしている項目であることから、「情動解放的自己開示動機」と命名した。信頼性係数は、 $\alpha = .82$ であった。第 2 因子は、自己開示をして相手から何らかのフィードバックを得ることを目的としており、特に相談をすることや共感を得ることを求めているため、「相談・共感追求的自己開示動機」と命名した。信頼性係数は、 $\alpha = .81$ であった。第 3 因子は、相手や雰囲気に合わせてすることで、相手との親しさを示したり、好意を得たりすることを目的としていていると考えられるため、「親密感維持的自己開示動機」と命名した。信頼性係数は、 $\alpha = .64$ であった。予備調査によって、3 因子、計 18 項目からなる否定的内容の自己開示動機尺度が作

成された。これを否定的内容の自己開示動機を測定する尺度として用いることにした。

## 本調査

### 目的

本調査では、自尊感情の高さが自己開示の程度や動機に与える影響について検討を行うとともに、自己価値の随伴性尺度を用いて自尊感情が「他者からの評価」、「関係性調和」に随伴する程度の違いによって、自己開示の程度、否定的内容の自己開示動機にどのような影響があるのかについて検討することを目的とした。

### 方法

被調査者：大学生 263 名に質問紙調査を行った。全対象者のうち、回答に不備があった者は分析から除外した。有効回答は、250 名（男性 116 名、女性 134 名）であった。平均年齢は、20.15 歳（ $SD = 1.43$ ）であった。

#### 質問紙の構成

- 1) 基本的属性 学年、年齢、性別の記入を求めた。
- 2) 自己開示をする相手の想定

否定的内容の自己開示をする相手について、今までに悩みを相談したことのある親しい同性の友人 1 人を想定し、名字のアルファベット 1 文字の記入を求めた。

- 3) 否定的内容の自己開示の程度を測定する尺度

否定的内容の自己開示をどの程度するかを測定するために亀田（2003）が作成した否定的内容の自己開示尺度を使用した。この尺度は「劣等感と対人関係の悩み」、「進路・適性の問題」、「情緒的問題」、「経済的問題」、「授業に関する悩み」の 5 つの下位尺度から構成されている。項目数は 22 項目で、5 件法で回答を求めた。

- 4) 否定的内容の自己開示動機を測定する尺度

否定的内容の自己開示をする際の動機について測定するために、予備調査で作成した否定的内容の自己開示動機尺度を使用した。項目数は 18 項目で、5 件法で回答を求めた。

Table1 否定的内容の自己開示動機尺度 各項目の因子負荷量

	1	2	3
<b>第1因子 情動解放的自己開示動機 (<math>\alpha = .82</math>)</b>			
7 不安や葛藤などを発散しスッキリしたいから	0.79	-0.17	0.01
6 悲しみや辛さに打ちひしがれているから	0.70	-0.05	0.06
19 伝えることによって不安や緊張を解消させたいから	0.67	0.11	-0.01
4 悩みを抱えているから	0.60	0.20	-0.17
11 落ち込んだ気分を脱したいから	0.60	0.00	0.06
18 とても頭にくることがあり、胸の中にしまっておけないから	0.57	-0.02	0.06
5 未知の状況を前にして、不安が高まっているから	0.46	0.11	-0.02
<b>第2因子 相談・共感追求的自己開示動機 (<math>\alpha = .81</math>)</b>			
3 自分の考えや選択が正しいかどうか不安で、確かめたいから	-0.04	0.72	-0.13
21 出来事や解決方法について人と一緒に考えたいから	-0.12	0.68	-0.18
16 人に励ましてもらいたいから	0.08	0.63	0.11
9 人に共感してもらったり、なぐさめてもらったりしたいから	-0.02	0.60	0.14
1 自分の気持ちや考えを理解してほしいから	0.09	0.58	-0.09
20 人に、あなたは悪くないと肯定してもらいたいから	0.08	0.53	0.25
13 自分だけがみんなと違うのではないかと不安になるから	0.00	0.44	0.20
17 重大な決断が迫られ、迷っているから	0.28	0.39	-0.08
<b>第3因子 親密感維持的自己開示動機 (<math>\alpha = .64</math>)</b>			
8 相手との親しさを示したいから	0.15	-0.15	0.72
12 相手からの好意を得たいから	-0.17	0.12	0.69
2 その場の雰囲気に合わせていたいから	0.04	0.00	0.43
累積寄与率		50.66%	
因子相関	1	0.61	0.05
	2		0.18

- 5) 自尊感情を測定する尺度

自尊感情を測定するために Rosenberg（1965）が作成し、山本・松井・山成（1982）が邦訳した自尊感情尺度を使用した。項目数は 10 項目で、5 件法で回答を求めた。

- 6) 自尊感情が随伴する領域を測定する尺度

「他者からの評価」、「関係性調和」の領域に自尊感情が随伴する程度を測定するために、内田（2008）の日本版 CSW 尺度（自己価値の随伴性尺度）を使用した。内田（2008）は Crocker & Wolfe（2003）の CSW（Contingency of self-worth）尺度の「神の愛」以外の項目について邦訳し、「関係性調和」の項目を追加し「家族からのサポート」の項目に「友人からのサポート」に関する項目を追加して日本版自己価値の随伴性尺度を作成した。この尺度は「競争性」、「外見的魅力」、「関係性調和」、「他者からの評価」、「学業能力」、「倫理的であること」、「家族・友人サポート」の 7 つの下位尺度から構成されている。項目数は 26 項目で、7 件法で回答を求めた。

#### 手続き

調査は、2012 年 10 月下旬から 2012 年 11 月上旬にかけて行った。講義時間を利用しての配布と、個人的に直接配布を行い、被調査者に回答を依頼した。質問紙の表紙には、調査に協力したくない場合は回答しなくても良いこと、途中でやめなくなった場合は回答を中止しても

構わないこと、回答は統計的に処理されるため個人の特定はされないことを記した。また、講義で配布する際には上記の内容を口頭で説明した。

## 結果

### 1. 各尺度の検討

#### 自尊感情尺度の検討

自尊感情尺度について、阿部・今野 (2007) は、自尊感情尺度について主成分分析を行ったところ 1 項目の負荷量が低かったことを報告した。そのため、本研究においても自尊感情尺度を構成する 10 項目について因子分析 (主因子法、プロマックス回転) を行った。累積寄与率は 36.71% であった。固有値の減衰の仕方から 1 因子構造であると判断した。項目 8 の共通性、因子負荷量が低かったため、項目 8 を除いて 9 項目について再度因子分析 (主因子法、プロマックス回転) を行った。その結果、累積寄与率は 40.87% であり、信頼性係数は  $\alpha = .81$  であった。また、因子負荷量も全ての項目において 0.35 以上であった (Table 2)。そのため、自尊感情得点の算出の際には、9 項目の得点を用いることとした。

Table 2 自尊感情尺度 9 項目の因子負荷量

項目	因子負荷量
1. 少なくとも人並みには、価値のある人間である。	0.68
2. いろいろな良い素質を持っている。	0.65
7. だいたいにおいて自分に満足している。	0.64
5. 自分には自慢できるところが多い。	0.63
6. 自分に対して肯定的である。	0.62
10. 何かにつけて、自分は役に立たない人間だと思う。	0.59
4. 物事を人並みには、うまくやれる。	0.53
9. 自分は全くだめな人間だと思うことがある。	0.46
3. 敗北者だと思うことがよくある	0.36
累積寄与率	40.87%

#### 各尺度の得点化

否定的内容の自己開示尺度、否定的内容の自己開示動機尺度、自尊感情尺度、自己価値の随伴性尺度の尺度得点について、各尺度を構成する全ての項目の得点を合計し、項目あたりの平均を算出して、各尺度得点とした。また、下位尺度についても同様に各下位尺度を構成する項目の得点を合計し項目あたりの平均を算出して各下位尺度得点とした。

### 2. 自尊感情と否定的内容の自己開示の程度

自尊感情の高さが否定的内容の自己開示に及ぼす影

響について検討を行った。被調査者を自尊感情得点の平均値 3.10 点に基づいて、3.10 点以下を低群、3.11 点以上を高群に分けた。自尊感情の高群と低群の否定的内容の自己開示得点と 5 つの下位尺度得点について  $t$  検定を行った。否定的内容の自己開示全体の得点と「授業に関する悩み」の得点については等分散が仮定されなかったため、Welch の方法による検定を行った (Table 3)。

否定的内容の自己開示得点について  $t$  検定 (Welch の方法) の結果、自尊感情高群の得点 3.88 点が低群の得点 3.65 点よりも有意に高かった ( $t(245.77) = 2.75, p < .01$ )。また、「劣等感と対人関係の悩み」は、自尊感情低群 3.40 点よりも自尊感情高群 3.88 点は有意に高かった ( $t(248) = 2.87, p < .01$ )。「情緒的問題」の得点は自尊感情低群の得点 3.77 点よりも高群の得点 4.10 点は、有意に高かった ( $t(248) = 3.17, p < .01$ )。しかし、「進路・適性問題」、「経済的問題」、「授業に関する悩み」の 3 つの下位尺度得点については自尊感情高群と低群の得点に有意な差は認められなかった。

### 3. 「他者からの評価」と否定的内容の自己開示程度

自己価値の随伴性尺度における「他者からの評価」得点の高さが否定的内容の自己開示の程度に及ぼす影響について検討を行った。被調査者を「他者からの評価」得点の平均値 4.73 点に基づいて、4.73 点以下を低群、4.74 点以上を高群に分けた。この 2 群の否定的内容の自己開示得点について  $t$  検定を行った結果、「他者からの評価」高群の得点 3.77 点と低群 3.76 点の間に有意な差は認められなかった ( $t(248) = 0.17, n.s.$ )。また、各下位尺度得点についても「他者からの評価」得点高群と低群の否定的内容の自己開示得点に有意な差は認められなかった。

### 4. 自尊感情と否定的内容の自己開示動機

自尊感情高群と低群に対して、否定的内容の自己開示動機得点について  $t$  検定を行った結果、「情動解放的自己開示動機」、「相談・共感追求的自己開示動機」、「親密感維持的自己開示動機」の 3 つの得点に高群と低群との間に有意な差は認められなかった (Table 4)。

### 5. 「関係性調和」と否定的内容の自己開示動機

自己価値の随伴性の「関係性調和」得点について、ク



ラスト分析の Ward 法により被調査者の群分けを行った。その結果、3つの群に分けるのが妥当だと判断した。3つの群の平均値には有意差があり、群1 ( $M = 3.06$ ,  $SD = 0.53$ ), 群3 ( $M = 4.43$ ,  $SD = 0.29$ ), 群2 ( $M = 5.52$ ,  $SD = 0.51$ ) の順に平均値が有意に高くなっていったため、それぞれを低群, 中群, 高群とした。

これらの3群の否定的内容の自己開示動機得点について被験者間一要因分散分析を行った (Table 5)。この結果から、「関係性調和」の3群において「情動解放的自己開示動機」では、有意な差は認められなかった ( $F(3, 246) = 0.78$ ,  $n.s.$ )。「相談・共感追求的自己開示動機」では、3群間に有意な結果が認められた ( $F(3, 246) = 9.20$ ,  $p < .01$ )。「親密感維持的自己開示動機」においても、3群間に有意な差が認められた ( $F(3, 246) = 7.42$ ,  $p < .01$ )。そのため、それぞれ Tukey 法による多重比較を行った。その結果、「相談・共感追求的自己開示動機」では、「関係性調和」低群の得点 3.18 点は他の2群よりも有意に低かった。また、「親密感維持的自己開示動機」では、「関係性調和」低群の得点 2.17 点は他の2群よりも有意に得点が低かった。しかし、中群と高群の2つの群の間には、「親密感維持的自己開示動機」の得点に有意な差は認められなかった。

## 考察

本研究では、自尊感情の高さと否定的内容の自己開示の程度、動機との関連について、また、自己価値の随伴性の「他者からの評価」の高さと否定的内容の自己開示の程度、「関係性調和」の高さと否定的内容の自己開示動機との関連について検討を行った。

最初に、自尊感情の高さと自己開示の程度との関連について検討を行った。その結果、自尊感情が高い人は

Table 3 自尊感情と否定的内容の自己開示得点の  $t$  検定の結果

	自尊感情	平均値	標準偏差	自由度	$t$ 値
否定的内容の自己開示	高群	3.88	0.69	245.77	2.75**
	低群	3.65	0.59		
劣等感と対人関係の悩み	高群	3.69	0.84	248	2.87**
	低群	3.40	0.77		
進路・適正問題	高群	3.93	0.8	248	1.52
	低群	3.78	0.77		
情緒的問題	高群	4.10	0.84	248	3.17**
	低群	3.76	0.86		
経済的問題	高群	3.87	0.83	248	1.13
	低群	3.75	0.84		
授業に関する悩み	高群	3.86	0.87	244.02	0.56
	低群	3.80	0.72		

\*\* $p < .01$

Table 4 自尊感情と否定的内容の自己開示動機得点の  $t$  検定の結果

	自尊感情	平均値	標準偏差	自由度	$t$ 値
情動解放的自己開示動機	高群	3.78	0.82	248	0.08
	低群	3.79	0.69		
相談・共感追求的自己開示動機	高群	3.55	0.79	240.17	0.57
	低群	3.60	0.62		
親密感維持的自己開示動機	高群	2.57	1.00	248	0.89
	低群	2.68	0.89		

Table 5 「関係性調和」の否定的内容の自己開示動機に関する分散分析の結果

	関係性調和	平均値	標準偏差	$F$ 値
情動解放的自己開示動機	高群	3.67	0.89	0.78
	中群	3.78	0.78	
	低群	3.83	0.64	
相談・共感追求的自己開示動機	高群	3.18	0.80	9.20**
	中群	3.62	0.58	
	低群	3.69	0.71	
親密感維持的自己開示動機	高群	2.17	0.90	7.42**
	中群	2.82	0.96	
	低群	2.66	0.91	

\*\* $p < .01$

低い人よりも否定的内容の自己開示得点が有意に高い結果となった。したがって、自尊感情が高い人は低い人よりも否定的内容の自己開示を行うことが示された。また、否定的内容の自己開示尺度の下位尺度得点についても検討を行ったところ、「劣等感と対人関係の悩み」、「情緒的問題」において、自尊感情が高い人の方が低い人よりも有意に得点が高い結果となった。つまり、自尊感情が低い人は高い人に比べて、否定的内容の自己開示をすることに抵抗を感じており、その中でも特に自分自身の劣等感、対人関係の悩み、また、腹が立った、悲しかったなど情緒的な問題について開示することを抑制している傾向があることが考えられる。また、否定的内容の自己開示動機については、自尊感情の高さによって有意な差は認められなかった。そのため、自己開示をしようとする動機の強さは自尊感情の高さによって差がない

ことが示された。

次に、自尊感情が「他者からの評価」に随伴する程度と否定的内容の自己開示の程度との関連について検討を行った。否定的内容の自己開示得点について「他者からの評価」が高い人と低い人との間には有意な差は認められなかった。自己開示を行う際には他者からの反応や評価に不安を感じるために抑制する（榎本, 1997）が、自尊感情が「他者からの評価」に随伴する程度に関わらず否定的内容の自己開示を行っていた。本研究では、否定的内容の自己開示を行う相手として被調査者に今までに悩みを打ち明けたり、相談にのってもらったことのある同性の親しい友人1人を想定してもらい、質問紙への回答を求めた。今までに悩みを相談したことのある同性の親しい友人とは、かなり親密度が高い友人であると考えられる。そのため、自分が話をすれば相手からの理解やポジティブなフィードバックが期待できる相手であることが考えられる。以上のことから、親しい同性の友人には、自尊感情が「他者からの評価」に随伴する程度に関わらず否定的内容の自己開示をすると考えられる。

最後に、自尊感情が「関係性調和」に随伴する程度と否定的内容の自己開示動機との関連について検討を行った。特に、自己開示には親密な人間関係を促進するという機能がある（榎本, 1997）ため、仲間との関係を保とうとする傾向がある「関係性調和」に自尊感情が随伴する程度と「親密感維持的自己開示動機」との関連について検討を行った。その結果、自尊感情が「関係性調和」に随伴する程度が最も低い人は、中程度の人や高い人よりも「親密感維持的自己開示動機」の得点が最も低いという結果となった。自尊感情が「関係性調和」に随伴する程度が中程度や高い人は、低い人よりも自己開示を通して親密さを促進しようとする側面があることが示唆された。しかし、「関係性調和」に随伴する程度が中程度の人と高い人との間には、「親密感維持的自己開示動機」得点に有意な差は認められなかった。本研究で自己開示の相手として扱った今までに悩みを相談したことのある同性の親しい友人には、否定的内容の自己開示を通して親密感を促進しなければならないということは考えにくい。そのため、自尊感情が「関係性調和」に随伴する程度が高いほど「親密感維持的自己開示動機」を

強く持つという結果には結びつかなかったのではないかと考えられる。かなり親しい友人と接する際には相手に嫌われるかもしれない、その場の雰囲気に合わせていなければいけないという不安を感じるものが少ないのではないかと考えられる。したがって、本研究で質問紙に回答する際に想定した親しい同性の友人ではなく、顔見知りの程度の人や、今後、親しい関係になりたいと思う友人に対しては否定的内容の自己開示を行う際に「親密感維持的自己開示動機」を強く感じることも考えられる。

本研究では、否定的内容の自己開示を行う相手として、親しい同性の友人に限定して調査を行った。しかし、自己開示を行う相手が親しい同性の友人以外の人になれば、自己開示の程度や動機についても変化することが考えられるため、自己開示の相手を変化させて検討していくことも必要であろう。

## 引用文献

- Crocker, J. & Wolfe, C. T. (2001). Contingencies of Self-Worth. *Psychological Review*, 108 (3), 593-623.
- 榎本博明 (1997). 自己開示の心理学的研究 北大路書房
- Greenier, D. K. , Kernis, H.M. , McNamara, C.W. , Waschull, S.B. , Berry, A. J. , Herlocker, C. E. & Abend, T. A. (1999). Individual Differences in Reactivity to Daily Events : Examining the Roles of Stability and Level of Self-Esteem. *Journal of personality*, 67, 185-208.
- 市村 (阿部) 美帆 (2011). 自尊感情の高さと変動性の 2 側面と自尊感情低下後の回復行動との関連 心理学研究, 82 (4), 362-369.
- 亀田佐和子 (2003). 否定的内容の自己開示と自尊感情および開示抵抗感の関連性 早稲田大学大学院教育学研究科紀要, 別冊 10 (2), 157-168.
- 片山美由紀 (1996). 否定的内容の自己開示への抵抗感と自尊心の関連 心理学研究, 67 (5), 351-358.
- 三上聡美・山口裕幸 (2008). 親密度の異なる友人に対する自己開示抵抗感に関する検討 九州大学心理学研究, 9, 75-81.
- 内田由紀子 (2008). 日本文化における自己価値の随伴性—日本版自己価値の随伴性尺度を用いた検証— 心理学研究, 79 (3), 250-256.